

M. ウルストンクラフトとフランス革命

久留島 京子

(1)

フランス革命とのかかわりを除いて、メアリ・ウルストンクラフトをかたることはできない。もちろん、彼女の思想を考えるにあたっては、イギリス急進主義グループの人々の与えた影響を無視することはできないし、また産業革命の進展に伴うイギリス社会の変化にも充分目を向ける必要がある。更に、彼女自身の生い立ちについての考察も（とりわけ女権論の形成に関しては）大きな意味をもっている。しかし、ここではフランス革命とのかかわりに焦点をあててウルストンクラフトの思想の変化を辿ってゆこうとするものである。彼女が革命フランスへ向けて出発したのは1792年も押しつまった12月8日のことであった。

1792年末のフランス、といえは革命は新段階に入ってゆく時期である。8月10日事件による王権の停止、9月に成立した国民公会の開会直後の王政廃止宣言、共和政樹立。——そしてまもなく多くの問題に関してジロندانとモンタニヤールの対立は激化してゆく。

こうして事態が険悪となったパリ、本来ならば危険を避けて去るべきパリに、女性の身でただ一人、ウルストンクラフトは到着する。それから95年4月、イギリスに戻る迄滞在したフランスにおいて事態は目まぐるしく動いてゆく。彼女の到着前から始まっていた国王の裁判——審問、有罪宣告、処刑という一連の出来事。既に宣戦していたオーストリアに加えてイギリス、オランダ、スペインへの宣戦布告、戦況の悪化。国内的にはジロندانの追放に成功したモンタニヤールの独裁、公安委員会を中心にした恐怖政治。——しかし、94年には戦況の好転とともにブルジョアジーの反撃、公安委員会の内紛等々も加わっておこるテルミドールの反動（7月）。以後ブルジョアジーによる独裁政府のもとでの政情不安——。遠くドーヴェーのかなたで賛嘆の思いをこめて眺めていた革命を、眼のあたりにしたウルストンクラフトの胸を去来するのは何であったか。

(2)

フランス革命がイギリスに与えた衝撃はとりわけ大きく、まさに「イギリスにおけるフランス革命」と表現されるような状況を呈することになる。

その口火は1789年11月、リチャード・ブライス博士によって切っておとされる。イギリス急進主義の旗手であり、宗教家としても信望をまつめていたブライスの一合会での演説がそれである。フランス革命賛美＝イギリス社会の現存の諸問題の指摘は多くの人々に感銘を与えると同時に、支配階級には憤激をよびおこすことになった。直ちに反論を発表したのがエドマンド・パークである（1790年10月）。かつてアメリカ独立に際しては熱烈な賞賛をおくったこの人の「フランス革命に関する省察」はあまりにも有名である。このパークの駁論はまたそれに対する反論を次々にうむが、その中には翌年3月に公刊された「人権論」もある。著者はトマス・ペイン。——いうまでもなく1776年、アメリカにおいて「コモン・センス」を発表して、イギリスからの植民地の独立に大きく働きかけた人である。この一連の革命支持者達は、ブライスを中心とした急進主義グループに属しており、その中にウルストンクラフトも数えられるのである。

ウルストンクラフトと急進主義とのかかわりは別稿にゆずるとしても、この渦の中で彼女の「人権の擁護」「女権の擁護」が執筆されたのである。否、むしろパーク攻撃はまずウルストンクラフトによって開始されたのである。彼女は「フランス革命に関する省察」が出るや、僅か数週間でこの「人権の擁護」を書きあげてしまったという。

パークへの反駁は、論理的にというよりも感情的な訴えかけというべきものであるが、それなりの効果をあげたのである。初版はすぐに売切れてしまい、次々に論評があらわれた。この場合の毀

誉褒貶は論者それぞれの立場によるものなのだが、無名の一女性がこれによってみとめられることになる。

「女権の擁護」はそれから2年後に出版されるが、ゴドウィンによればそれは「6週間足らずの間に」①書きあげられたという。その献辞がタレイランに捧げられているのは序文にもみられるように、タレイランの「公教育に関する報告」(1791年)への不満が彼女の筆をすすめさせたからである。②即ち先にも述べたように、当時のイギリス急進派の一人としてフランス革命に期待をよせていた彼女は、立法議会の雄弁家として活躍したタレイランのこの報告が、ある点までは女子教育を前進させながらも、結局は女性を家庭の中にとじこめてしまおうとする点に抗議したのである。③

この様にフランス革命に反応した女性であってみれば、革命の渦中へと進んで入りこんでゆく行動もそれ程奇矯なものとはいえないかもしれぬ。しかし、単なる関心に加えて彼女をフランスへ向かわせた直接の動機は、その失恋に求めることができる。のちに彼女の夫となったゴドウィンも書いている。「フランスへいった主な理由の一つは、フューズリ氏に関するものであったと思われる。」

ここでくわしくのべるいとまはないが、当時の著名な画家フューズリへの恋を断ち切る為に傷心のウルストンクラフトは、思い立ってパリへと向かうのである。このフランス旅行について「その期間が正確にきまっていたわけではなく、彼女が抱いていたただ一つの目的は、混乱した自分の心をいやそうと努めることであった」らしい。だから彼女は「ロンドンの下宿を引き払うことすらせず、出発直前に会った友達には、6週間いなくなるとだけ語っていた」のである。④

(3)

パリに到着した彼女を迎えてくれる家はあったのだが、その家族は難をさけてパリを出ており、残された召使達と始めた生活は陰鬱なものであった。到着して間もないそんな或る日(12月26日)、彼女は審問のため公会にひかれてゆく国王を窓越しにみて衝撃をうける。あくる1793年1月21日、国王は処刑される。この革命の進行はイギリス国内に驚愕を与えると同時に、ジャコビニズムへの激しい憎悪をまきおこした。そして2月1日、フランスはイギリスに宣戦する。

そのころペインがパリに亡命し、ウルストンクラフトは彼と旧交を温めることになるが、またその頃にはパリでの交友関係もできて心のよりどころをもつことになる。

あまり知られていないこの頃のことについて新しく発見された彼女の手紙が、ひとすじの光を投げかけている。⑤ R. パーロウへの手紙の中でウルストンクラフトは、ある人からイギリスに帰るための馬車に空席があるという申出をうけながらも、苦勞してフランス語をマスターして無事にのり切ってきたというのに、「更にまた教育問題を考究するために任命された委員会の為に教育計画を書いている時に」帰国するのはつまらないと思う、と書いている。

すでにタレイランはこの時パリにいなかったが、コンドルセは前年4月、国民立法議会に教育組織についての長い提言をしている。ウルストンクラフトが教育計画について何かまとめていたとすれば、コンドルセの考え方におおかた同意していた彼女が、コンドルセにあって意見をきく為にもあえてフランスにとどまるということもありえた筈である。敵国人としてパリにとどまることの危険があったとはいえ、この段階ではまだそれ程憂慮するものではなかったらしい。これは、彼女が当時の革命グループと親交をもっていたことにもよる。(たとえばペインは国民公会の一員であったし、彼女はジロندانに多くの知己をもっていた。)しかし、ジロندانが追われるようになってから、事態は急速に悪化する。

ところでパリでの友人の一人、クリスティの家でウルストンクラフトは、G. イムレイに出あうのである。最初はむしろ嫌悪の情を抱いていたアメリカ退役軍人イムレイと、彼女が深い関係をもつようになるのは93年4月の半ばごろであった。⑥内密につづけられていた二人の関係を公にせざるをえなくなるのは、四ヶ月のち、イギリスとフランスの関係の悪化がこのイギリス女性の身に危

険を感じさせたからであった。

イムレイは彼女を妻としてアメリカ大使館に登録し、1793年8月半ば、二人は同棲する。これは開始されたイギリス人逮捕から彼女を守るためのイムレイの措置であった。ゴドウィンによればウルストクラフトは「イムレイ氏との結婚には反対であって、彼女は、自分が始末しなければならぬと考えていた家庭内のあるいざこざに彼を巻きこんだり、また彼女を襲っている金銭的な要求に対して彼に責任をもたせたりはしたくなかったからである。」⁽⁷⁾

彼女がイムレイと正式に結婚しなかったことについては、一方では彼女のふしだらさに対する非難が、他方ではその独立女性としての自覚的行動への評価がある。しかし、この場合、如何であろう。たとえ彼女が独自の結婚観をもっていたにせよ、むしろ当時の情勢下での敵国女性にとってそれは自然のなりゆきではなかったろうか。そしてまた、かりに何らかの儀式が行われたとしても、それがイギリスで有効であったかどうかは疑問である。⁽⁸⁾

(4)

ゴドウィンのいうように6週間の予定で始めたかどうかはさだかでないが、恐らく軽い気持でのフランス旅行は事態の急変から2年以上にもわたってしまったのである。その間に「教育計画案」に実際どれ程参画したかについての記録は何も残されていないけれども、国王裁判、処刑、恐怖政治という未曾有の展開がこの思想家に筆をとらせたのは当然である。

一つのまとまった著作としては「フランス革命の起源と進展についての歴史的・道徳的考察 第一巻」がある。これは1794年、ジョンソン書店から刊行された500頁余のものであるが、三・四巻にわたって展開すべきものの第一巻として執筆された。従ってこの著作では、社会の進歩や政府の目的等の一般論から始まって革命前夜のフランスの政治、カロンヌ、ブリエンヌの改革等もつぶさに検討される。ただ革命の経過は、国王がパリに連行される1789年10月というごく初期までで終わってしまい、続巻が出ていないのは惜まれる。

この「考察」では革命の経過が順序立てて詳細に記述されており、はじめは言葉も不自由であった異邦人としてのすぐれた記録といえよう。⁽⁹⁾そしてこの著述で注目される点はフランス革命の原理そのものを支持しつつけながらも、そこにくりひろげられる革命の様相を冷静かつ公平にながめていることである。彼女は革命のゆきすぎは、原理上の誤謬によるのではなく、長年月にわたる専制政治で墮落したフランス人の性格によると考えた。革命が経過する中でその決定的瞬間ともいべき時期に、国王なり側近なりがもっと異なった対応の仕方をしておれば、この様に悲劇的な結末には到らなかったのという思いがこめられる。そしてその国王や王妃（とりわけ彼女は王妃マリー・アントワネットに対して厳しい評価をする）の悲劇的な運命は、彼ら自身の責であると同時に、彼らのそうした性格は教育と環境の産物としてうけとめられる。

「教育と風習の環境が人間性の自然の法則を変えることはたしかだ」とウルストクラフトはいう。——風俗の墮落したフランスに、若く美しいマリー・アントワネットはやってきたのだ、かのデュ・バリ夫人の勢力の絶頂期に——。「その様な放埒な環境の中でどうして彼女が弊風にそまらずにおられようか？」⁽¹⁰⁾しかも王妃の性格はパリにくる前から「頹廢した、阿諛追従する僧院長によって」教育された結果なのだ。だから最高に贅をつくして快樂にうつつをぬかし、宮廷の陰謀を操りながら王妃はひどい偽善者になってしまう。そしてその王妃に完全に支配されたのがルイ十六世であった。人民の国王に対する愛は根絶し難いものなのだから、国王がもう少しましな行動をとっていれば、命まで失うことはなかったのに……かれをその様にしたのは、やはり宮廷という環境とその教育なのだ。「王位継承者の教育はふつうの聡明さや人間感情を、必然的に破壊してしまう」のである。だからこの君主の教育はかのルイ十五世同様、彼を「官能的な偏屈者」にするのに役立ったにすぎない。⁽¹¹⁾

これはひとり王室にとどまらぬ。僧侶も貴族も、そして市民も亦しかり。専制主義が上下ともに人を害ってきたのだから、それぞれの身分の人間が、それぞれおかれた状況の中で毒されてきたのだ。それは革命の主力となった国民の大衆にもあてはまる。圧制の下に苦しみ、専制政治をはねのけてゆくのは彼らではあるが、「愚行、利己心、狂気、不実、そして致命的な偽りの愛国心」から免れることはできない。何故ならこうした徳性の欠如は墮落した風習の共通の結果であるし、長い間この国の上層身分たちを野獣のようにしてきた隷属と遊蕩の附随物でもあったのだから。しかも隷属にならされてきた人々は、どんな事にたずさわっても「いきなり極端から極端へつっ走るものである。」フランス国民がおとしめられてきた隷属状態から、無拘束の自由がえられたとなると、予期されるものは報復である。丁度「放校された少年のように、彼らはいたずらをすることによって自分たちの自由を確認しようとする」のである。^⑫

(5)

つまり、フランス国中にみちている徳性の欠如が恣な行動をうみ出した。最初にいかに有益な改革を宣言しようとも、一時的に英雄的行動があろうとも、頹廢した国民が公共善を目ざして有徳な願望を着実に達成することは期待できない。彼女はのべている。

「フランス人の性格は、長年月にわたる根深い専制によってあまりにも墮落させられてしまっているから、パスチュー奪取をきわだたせている英雄的行為の中にすら、その後の全ての愚行と犯罪をうみ出したあの猜疑心の強い性質や、ぎらぎらする虚飾にみちた野心をみとめざるをえないのである。」というの、最も愛国心にみちた行動に於てすら、名声が拍車となり、フランス人の幸福よりもむしろ名誉が目的であったように思われるのである。^⑬

このことから「徳性なしには、理解力のどんな大きな力も、或は行動の真実の尊厳もありえない」し、また徳性ぬきのやさしきや同情も同様だ。芝居に行ってもその悲劇的な結末をみるにたえかねて劇場を出てしまうほどの人々が、この革命の残忍な行動を敢てする怪物を育てあげたのだから何とも不思議なことだ。また、やさしきものとよばれる女性が怒ると極めて凶悪な蛮行に及ぶことも思いおこしてみるがいい。単なる同情やみがきあげられた風習などによってうみ出されたやさしきは、陶冶された理解力をもった人間性に比べると、全く劣るものである。「人間を猛獣から区別するのは感情ではなくて、徳性なのである。」^⑭

ところがフランス人は自分たちの性格を知らない。実のところフランス人ほどチェックの必要な人間はいない。それなのに彼らは完全な文明の時代にのみ妥当する規制を書物からよりぬいてきた。実際的な知識によって導かれないから、各人が皆政策案をつくって社会を混乱に陥れてしまい、また時代に先んじて完全な政府のモデルを描き出した天才的哲学者達の計画を追い求めて国家を不幸に陥れてしまった。^⑮

「国家の革命は漸進的なものでなければならぬ。」しかし、人々は人間の平等を説く巧妙な議論に容易にひきずりこまれるものだし、こうした議論は常に人民政府の指導者の常套手段なのだ。文明が完成の域に達した時にのみ妥当するプランを直ちに実現しようとするところから、勢い行動の過度が生じる。

フランスは既にある程度の自由を獲得したし、国民は最も重要な政治的真理をも把握していた。だから次にはこれをいかに保持し、国民の自由をより確実なものにするかに意を用いるべきであった筈だ。アメリカ独立革命の指導者はその点においてプラクティカルな知識にもとづいて行動したが、フランス議会のメンバーは、人々の心がその為には熟していない完全状態を目標として、結局は最も危険で放埒な精神の種をまいてしまったばかりでなく、死にもの狂いの王党派を徒に刺戟したのであった。

自由が何に存するかを知らぬのに、人々は自由を合言葉とした。およそ全ゆる熱狂は、それを最

高潮にするためには無知によってわきかえらせることが必要なのである。……ウルストンクラフトはこう指摘している。従って人民の幸福の為の救済策は、国民性が改造されて新しい政治制度を支えるようになる迄は達せられもせず、また期待すべきでもないのに、人々はただただ即刻実現を要求した。しかも食糧の欠乏という革命に共通の苦情の種がパリ民衆の不安を増大し、彼らを絶望的にしていった。

こうした中でフランスの女性は世界中のどこの国におけるよりも自由を享受しうるようになったのだが、それを企みのある男達が利用した。10月5日のヴェルサイユ行進は、多くの革命史家によって高く評価される事件なのだが、ウルストンクラフトはこれを野心家のオルレアン公が仕組んだ芝居だとみる。つまり、女性というものが「その瞬間の感情のみによって動かされると思われている」ことから、彼女達は「一種の安全装置」として利用されたというのだ。パンの欠乏に苦しむ女性達を「向こうみずの行動にかりたてて、それを愚行とよび」ただ飢えの怒りによって惹起されたようにみせかけ、ついには王と王妃の殺害にまでもってゆこうとする。^⑬

従って彼女はこの時主力となった女性達はオルレアン公のいたパレ＝ロワイヤル——最も恥ずべき女達やならず者達の巢——の住人であったという。「女性の集団が王の交替を要求したり、議会の憲法制定の遅滞を非難したりすることは到底ありえない。また、女性が扇動されずに動くわけがない」と考えるウルストンクラフトは、革命の過程における女性の働きを全く評価していない。そして女権論者ならば注目していい筈のオランプ・ドゥ・グージュその他の女性達にも全く言及しないのである。

(6)

フランス革命はその原理において決してあやまってはいなかったが、それを實現する人々が、道徳的に未だそれに不適合であった。従って改革は、徐々に人々の性格の改変を伴って行われるべきであったのに、一挙にその「真理」にむかってつきすすんだことに誤謬がある——ウルストンクラフトはこうみる。渡仏後まもなく目撃した審問にひかれてゆく王の「想像していたよりもはるかに威厳ある」^⑭態度に心をうたれた彼女は、ギロチンでの処刑見物にいそぐ人の陽気さや血で汚された土地を平気で通りすぎてゆく人々の無神経さに反感を覚える。そして革命のゆきすぎを看過してきた議会が毅然としていなかったことも非難する。しかし、こうした状態を現出したのも「富者と貧者が暴君と奴隷の集団にわけられたからであり、そして奴隷の報復は常に凄絶なものなのだ。」

だから、権力をにぎったのちの人民の行動に対してきびしい批判をしながらも、このパリ人達の残忍さに唯一の弁明をみとめてやるとすれば、それは「彼らが法律というものに何の信頼も抱いていなかったということである。」即ち専制政治の下での不正と法の不公平を指摘する。「理性に矛盾し人間性にそぐわぬ政策や法律の制度によって全ゆる神聖で道徳的な、すばらしい感情は抹消され、又、人間の尊厳は汚されてしまったのである。」

しかしこうした弁明にも拘らず、ウルストンクラフトは理想社会と現実の社会の進展の懸隔をつよく感じざるをえなかった。この書は1789年10月で終わっているが、いうまでもなくフランス革命の全過程に対する評価を念頭における叙述である。いかに合理的に構築された社会像があろうとも、それを實現するのは人間である。現実の人間は決して有徳ではない。革命の過程でウルストンクラフトに最も衝撃を与えたのは人々の徳性の欠如ということであった。それが実際には理想の社会の實現をかげらせるものだと思われた。

先の「女権論」においても、理性と徳性は人間にとって最も大切なものだと考えられた。ただこの場合は、理性と徳性の陶冶における男女別々の目標と教育に攻撃の矢が放たれる。むしろ男性と同等になることが目ざされたのであるが、ここではその合理主義そのものへの全き信頼がゆらいできたのである。ウルストンクラフトの個人的体験からいっても合理主義者イムレイの徳性の欠如が

どんなに彼女を苦しめたことか。フランス革命の考察における彼女の意外に醒めた目は、その後の彼女の思想の変化につながってゆくものである。

- ① W. Godwin ; *Memoirs of the Author of a Vindication of the Rights of Woman*. London, 1798. pp.84 ~ 5.
白井厚・堯子訳「メアリ・ウルストンクラフトの思い出——女性解放思想の先駆者」74頁。
- ② Mary Wollstonecraft ; *A Vindication of the Rights of woman*. London, 1792. pp.7 ~ 11.
- ③ R.M. Wardle ; *Mary Wollstonecraft, a Critical Biography*, London, 1951. p.145.
- ④ W. Godwin ; *Memoirs* ; pp.97 ~ 100. 前掲訳書 81 ~ 3頁。
- ⑤ K.N.Cameron ; *Shelley and his Circle, 1773 ~ 1822*. Cambridge, Mass., 1970. pp.862 ~ 77.
- ⑥ Cameron は、2月に帰国のチャンスがあったのにも拘らず、ウルストンクラフトがフランスにとどまろうとしたのは、すでにその時からイムレイに心をひかれていたことも考えられるとのべている。Ibid., p.871.
- ⑦ W. Godwin ; *Memoirs* ; p.107. 前掲訳書 87頁。
- ⑧ K. Paul ; *Prefactory Memoirs to Mary Wollstonecraft's Letters to Imlay*. London, 1879. p. xxxix.
- ⑨ カーライルのフランス革命史よりもすぐれているという評価が与えられている。Ibid., p. xliii. またギボンの「ローマ帝国滅亡史」にも匹敵するとも評された。M. Limford ; *Mary Wollstonecraft*. London, 1924. p.108.
- ⑩ M. Wollstonecraft ; *A Historical and Moral View of the Origin and Progress of the French Revolution, and Effect it has produced in Europe*. Vol. I, London, 1795. p.33.
- ⑪ Ibid., pp. 133 ~ 5.
- ⑫ Ibid., p. 103.
- ⑬ Ibid., p. 252.
- ⑭ Ibid., p. 258.
- ⑮ Ibid., pp. 354 ~ 9.
- ⑯ Ibid., pp. 426 ~ 69.
- ⑰ Wardle ; *Mary Wollstonecraft*. p. 184.